



一緒に食べる
被災地ボランティア記⑧



震災前の町の中心に集った住民
復興を誓うポスターから

岩手県大槌町でのボランティアの活動日数は四日間。仮設住宅訪問は一日の学童保育を除いた三日間で、四十八カ所に散在する仮設場所の中の三カ所を訪ねた。

一日目は五十九戸の大槌第七仮設。二日目は四十戸の小槌第二十二仮設。三日目は百一戸の吉里吉里第二仮設と、戸数は場所によってさまざま。今回はそれぞれの仮設住宅の集会所で昼食時にふぐ雑炊を振る舞った。

誰でも経験があると思うが、知らない人でも食事をともにすると急に親しくなる。そしてそれまで重かった口も軽くなり、自然に話が弾む。その中で、一人住まいの老婦人の言葉が仮設住まいの現状

をよく表しているように思えた。
「震災直後よりも仮設に住むの方が孤独で寂しい」

震災直後は気持ちも張り詰め、講堂などでの生活も隣の人の境はダンボール。お互いに声を掛け合い、何か月もの苦しい生活の中で友達もできた。しかし待望の仮設住宅が完成し、そこに入居すると、親しかった人とはばらばらになり寂しい。確かに生活は少し安定したが、一人住まいの自分にとっては今の方が孤独だと言う。

心は海岸沿い。仮設住宅が建てられた所は離れた山手の不便な所だ。車の運転もできない高齢者にとっては孤立した生活しかできない場所だ。

老婦人はふぐ雑炊を食べながら「こうして皆さんと一緒に食べる」と本当においしい。身も心も温かくなるのはこんなことを言うので「すよね」と笑顔で話す。それが「一人で食事をする寂しさ」となつて伝わってくる。



ベースキャンプで下準備した出し汁を運ぶ若者

に食事をすることをする。軽んじられる傾向がある。物質的な豊かなさの中で合理的主義、利己主義が目立ち、一人で食べることが気楽だからと、家庭内でも「個食」が進んでいるという記事を見たことがある。

我々が生きていくのに食べることは不可欠。「どう食べるか」は「どう生きるか」につながっている。食事は単に食べるだけではなくコミュニケーションの場であり「食事をともにする」中から「共に生きる」という連帯感が自然に生まれてくるのだらう。そういうえば新約聖書の中のイエス・キリストの大事な教えや生き方は食事の席で示されている。

「絆」といふ言葉がよく使われる。糸へんに半分のと書いて「きずな」と読む。お互いに半分ずつの糸を結びあう。一緒に食べることで絆は深まる。

今回参加した主婦の提案で実施したふぐ雑炊のふるまい。彼女は下準備が比較的簡単だからと言っていたが、一緒に食べるこの大切さを生活の中で実感しているのだらう。

帰宅し、冷蔵庫の中に真空パックのふぐがあつたので、早速友を招いてふぐ雑炊を楽しんだ。



一緒に食べる被災者の人たち